

視覚情報を付加したオリジナル英語学習用ポッドキャストによるブレンディッド・ラーニング

榎田 一路

広島大学外国語教育研究センター

1 はじめに

広島大学外国語教育研究センターでは、2種類の英語学習用オリジナルポッドキャストの開発および配信を行っている。まず2008年8月から、Joe Lauer 准教授と筆者を中心に“Hiroshima University's English Podcast”¹⁾ (以下、HUEP) の配信を開始した。そして2012年3月から、James Selwood 特任講師による時事英語ポッドキャスト“English News Weekly”²⁾ の配信が開始された。いずれも15～20分程度の音声番組で、毎週更新されている。現在、両番組あわせて毎日2,000アクセス前後のアクセス数となっている。

小論では、HUEP の会話音声文字や画像と組み合わせたムービーを作成し、WBT (Web-Based Training) と組み合わせたブレンディッド・ラーニング (以下、BL)³⁾ を行った授業実践の概要と、その結果を報告する。

2 本実践の背景と目的

以前にも榎田 (2011) 等で指摘したように、ポッドキャストを英語教育に活用するメリットは、学習者・教授者双方にとって大きい。学習者のメリットとしては、無料である、世界中から配信されている無数の番組から自分のレベルと興味にあった番組が見つかる、汎用性の高いファイル形式なので多様なプラットフォームで利用できる、ダウンロードが可能なのでパソコン上のメディア再生ソフトを用いることで速度調整が可能である、といった点が挙げられる。また教授者側から見れば、教材配布にあたり CD-ROM 等のパッケージメディアが不要である、利用にあたり著作権処理が不要である、RSS フィード⁴⁾ を学習の「ベース・メーカー」(池田 (2008)) として活用しうる点などが利点として挙げられる。費用をかけることなく、英語学習の絶対量を確保する手段として、その潜在的可能性は非常に高い。

このような背景から、オリジナルのポッドキャストの開発、配信および授業での活用を通じて広島大学の学生が英語学習を楽しみながら継続できる手段として、HUEP が開始された。同ポッドキャストは「ドラマで英語を学ぼう」「やさしい英語会話」「異文化ディスカッション」「Joe のなるほど! 英文法」の4種類の番組から構成され、それぞれ内容と対象レベルにバラエティを持たせている。

これまで HUEP に関連する取り組みを挙げると、開発に先立つ事前調査、配信システムの構築および教材開発、自学自習用教材としての試用、希望者を対象としたポッドキャストの活用による縦断的研究、学内の LMS (Learning Management System) を利用した大学英語授業の副教材としての継続的活用、さらには携帯電話やスマートフォンへの試験的配信を行ってきた。これらの経緯や、ポッドキャストのシステム・コンテンツに関する詳しい説明などについては榎田 (2008, 2009, 2010, 2011, 2012) および Lauer (2008, 2009), Lauer and Enokida (2010) を参照されたい。

上記の取り組みの主な結果をまとめると、以下ようになる。(1) ポッドキャストを利用した多くの学生が、手軽で効果的な学習方法として肯定的に評価している。(2) 一方、教材コンテンツをネット配信しただけでは、それらを自発的に聴取しようとする学生は少ない。ポッドキャストによる自律的学習のきっかけを与えるためにも、授業等でまず一定期間、強制的にでも聴取を課すことは効果がある。(3) CALL と LMS を利用した授業環境においては、学生個人所有の携帯電話やスマートフォン等を利用したモバイルラーニングに積極的な意味を見いだせない。

今回の実践では、この (2) と (3) の点を踏まえ、ポッドキャスト素材から LMS 上での使用に特化した WBT 教材を作成し、一定期間の聴取を課すことにした。モバイル学習においては、番組を視聴しながら端末上で学習活動を行うことが非常に困難であるが、パソコン用の WBT であればそれが可能である。また、音声だけではなく動画を視聴しながらの学習も可能である。

現在、広島大学外国語教育研究センターが配信しているポッドキャストは、様々な環境で聴取していると思われる利用者の便宜を考慮して、10MB 前後の音声ファイルで配信している。一方、現在では YouTube など動画配信も普及しており、本多他 (2009) などのようにポッドキャストから “Vodcast”⁵⁾ に移行した事例も見られる。このような Vodcast への完全移行は、音声のみの番組製作に比べて多大な時間と手間を要するが、音声ポッドキャストに文字と画像を組み合わせたムービーを作ることは比較的容易である。吉田 (2010) が指摘しているように、視覚イメージ情報を提示するだけでも学習が十分に効率化されるはずである⁶⁾。

今回使用する WBT 教材では、このように文字と視覚情報を付加した音声ポッドキャストを提示しながら、ディクテーションを行えるようにした。さらに、この教材による個別学習と、授業での一斉指導を組み合わせた BL を実施することにした。本実践の目的は、英語学習用ポッドキャストから WBT 教材を作成し、それをを用いた教室外の個別学習と、その後の授業活動を組み合わせた BL を行い、学習者の反応および学習の動機づけに及ぼす効果を探ることにある。

3 実践の概要

本実践は、広島大学の教養教育英語科目「コミュニケーション IB」2 クラスにおいて、6 週間実施された。対象としたクラスは、教育学部の大学 1 年生 (n=41) と、理学部・生物生産学部の大学 1 年生 (n=41) である。いずれも習熟度別に編成されており、それぞれの TOEIC 平均スコアは、前者が 545.1、後者が 394 である。

対象としたクラスは、広島大学の一部専攻プログラムにおいて 2011 年度より施行されている英語 8 単位化対象クラスであり、外国語教育研究センターの「英語力向上 WG」が中心となり、同一のシラバス、教科書、試験、評価方法のもとで展開されている。授業は CALL 教室で行われ、広島大学の標準的 LMS である WebCT が利用されている。授業は教科書を中心に行われ、授業時間外にも WebCT を用いた学習活動が課されている。さらに、外国語教育研究センターにより開発された「広大スタンダード 6000 語彙リスト」による毎週 200 語の単語学習が課されている。このため、ポッドキャストは副教材の位置づけとなり、ポッドキャストを利用した活動は毎回の授業のうち 10 分程度に限られる。

このような条件の中でポッドキャストを利用した BL を実現するために、本実践では (1) 授業時間外の学習として、WBT を利用したポッドキャストの聴取およびディクテーション、(2) 授業中の活動として、内容に関する多肢選択式テストおよび会話の要約、以上の 2 つの活動に絞った。(1) の手順として、まずナチュラルスピードで会話のポイントをつかみ、次にスロースピー

ドでディクテーションを行い、最後にもう一度ナチュラルスピードで会話を聞き直す、以上の3ステップで学習することとした。本実践の開始前に、学生には以上の手順を周知するとともに、ディクテーションを始める前に必ずナチュラルスピードの会話を聞くことを指示した。

WBT教材を作成するにあたり、まず、ポッドキャストに視覚情報を付加したムービークリップを作成した。ムービークリップは、「やさしい英語会話」でスロー・ナチュラルの2種類の速度で読まれている会話のそれぞれ前半部分を抜き出し、それに文字情報と画像を付加し、それぞれのスピードで会話を聞いている間に学習者が行うべきことを明確化した。ムービーの最初にナチュラルスピードの会話の流れ、この間画面には「聞き取りのポイント」3つと、会話に関連した画像が表示される。ナチュラルスピードの会話が終わると、今度はスロースピードで同じ会話の流れ、画面ではスクリプトと穴埋めディクテーションの問題が提示され、学習者は適宜一時停止しながら問題に取り組むこととした。なお、作成には Windows Live ムービーメーカーを使用した⁷⁾。

こうして作成したムービークリップは、オリジナルおよび著作権による使用制限のない素材⁸⁾を利用しており著作権上問題がないことから、YouTubeを通じて配信した(図1)。YouTubeを利用するメリットとしては、(1) スマートフォンやタブレットなど様々なプラットフォームで利用できる、(2) アップロードの際、多様なファイル形式に対応している、(3) 公開・非公開などの詳細な設定が可能である、さらに(4) 詳細なアクセス情報が把握できる、などが挙げられる。



図1 YouTubeを用いたムービーの配信



図2 KEDシステムの画面

次に、YouTubeを通じて配信したクリップをディクテーション用のWBTと組み合わせることで、授業時間外でもディクテーションが自学自習できるようにした。WBTとして利用したのは、安田女子大学(広島市)で開発され、北辰映電株式会社から発売されているWBTオーサリングシステム「YASUDA SYSTEM」の一部、「KEDシステム」である。KEDシステムの特徴は、入力された語句に対し単語レベルで正誤判断と正解率が即座にフィードバックされるので、聞き取れない個所に焦点を置きながら、何度でも音声聞き直して反復的にディクテーションを行える点にある。KEDシステムはYouTubeの動画の埋め込みに対応しているので、画面上に動画と重要語句の解説を同時に表示できる(図2)。このようにWBTを用いることで、紙媒体では難しい反復ディクテーション練習を自学自習ベースで行える環境を構築した。

授業時間外の宿題として、学生は WebCT にアクセスして、上述の単語学習に加え、ポッドキャストを利用したディクテーション（5問）を提出しておくことが求められた。提出期限は、授業の前日に設定した。次に授業中の活動として、ワークシートを利用した多肢選択式テストおよび会話の要約を行った。多肢選択式問題は、YouTube 上のムービーに表示された聞き取りのポイントに基づいて作成され、選択肢はワークシート上には記さず、英文音声を取り取る形式にした。音声問題の作成には音声合成ソフトウェアの Globalvoice English Professional（HOYA サービス株式会社）を使用した。その後、5分の制限時間内に、会話の内容を英語で要約させた。さらにワークシート上で、会話を聞いた回数および主観の評価による難易度を回答させた。これらの活動終了後、WebCT を通じて問題の正解と会話の日本語訳を提示した。

教材として使用した会話は、その時点で未公開のものを使用し（表1）、教室での活動が終了した翌週には一般公開されるようにした。教材では前述のとおり会話の前半部分だけが使われているため、ストーリーが中断しているのに対し、公開された番組中では会話の全部と解説が含まれているので、学生には、公開された番組を復習として聞いておくことを促した。

表1 使用したエピソードの一覧

	タイトル	宿題提出期限	一般公開
Ep. 1	The Power of Colors	5/24	5/29
Ep. 2	Take Me Out to the Ball Game	5/31	7/17
Ep. 3	Pay It Forward	6/7	6/19
Ep. 4	Sleeping Well at Night	6/14	6/26
Ep. 5	Mosquitoes Love My Blood	6/28	7/10
Ep. 6	Checking Out Guys	7/5	7/24

4 実践の結果

本実践の結果について、YouTube と KED システム上に記録された履歴、毎回のワークシートの回答、および本実践終了後のアンケート調査結果を中心にみる。

4.1 YouTube のアクセスログ

最初に、YouTube のアクセスログから、各エピソードの曜日別アクセス数を図3に示す。授業は毎週金曜日に行われたので、ディクテーションの宿題の提出期限を翌週木曜日に定め、期限後の提出も条件付きで認めた。このグラフは宿題を公開してから、翌週木曜日の提出期限を経た1週間のアクセスの推移を示している。なお、これらの数字はいずれもユニークユーザー数である。

エピソードにより多少変化はあるが、提出期限である木曜日にアクセスが集中している。Ep. 1 は最初の課題のためか、期限を過ぎた後のアクセスがやや目立つものの、以後はほぼ同じパターンとなっている。Ep. 2 のように、木曜日のピークが小さく、それ以前のアクセスが多いものもある一方で、Ep. 3 のように木曜日のアクセスが再び増えているものもあり、エピソードごとに若干の差が見られる。いずれにせよ、義務的に学習を課すことにより、多くの学生が教材を定期的に聴取している様子が伺える。

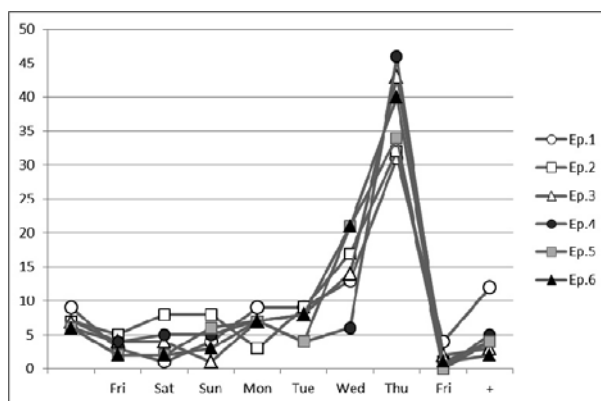


図3 YouTube アクセスログ

4.2 エピソード別の聴取回数と難易度

次に、学生の自己申告による、エピソード別聴取回数と難易度を図4と図5に示す。横軸は聞いた回数および5段階評価の難易度、縦軸は学生数である。

聴取回数は2～3回の集団と、8回（あるいはそれ以上）の集団に分かれている。WBTの反復ディクテーションにより、何度も聞き直して学習することが求められているため、会話を反復して聞いていることがわかる。エピソード別の難易度は、Ep.1、Ep.2、Ep.4が比較的低く、Ep.3とEp.6が比較的高いと感じている学生が多い。これを先ほどのアクセス数と対照させると、難易度の低いエピソード（Ep.1、Ep.2）は提出期限以前のアクセスが多く、逆に難易度の高いもの（Ep.3、Ep.6）は提出期限当日のアクセスが増えたり、アクセス数自体が減少している。

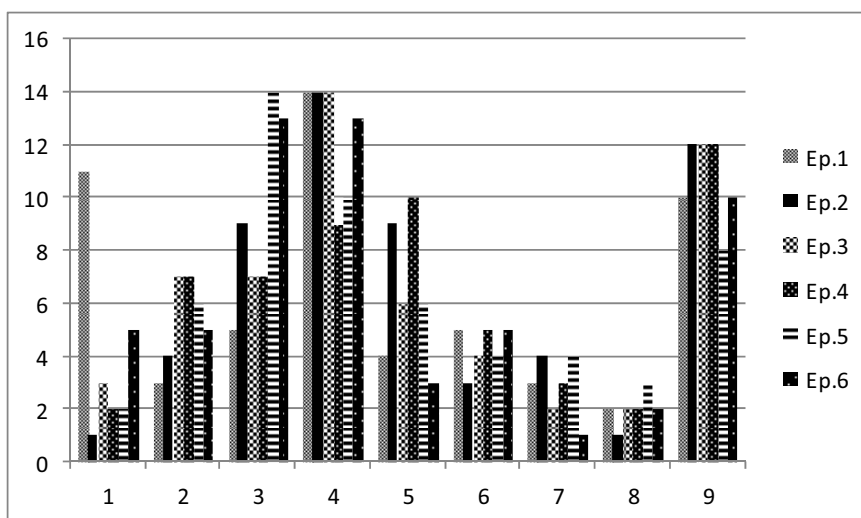


図4 エピソード別聴取回数 (n=57)

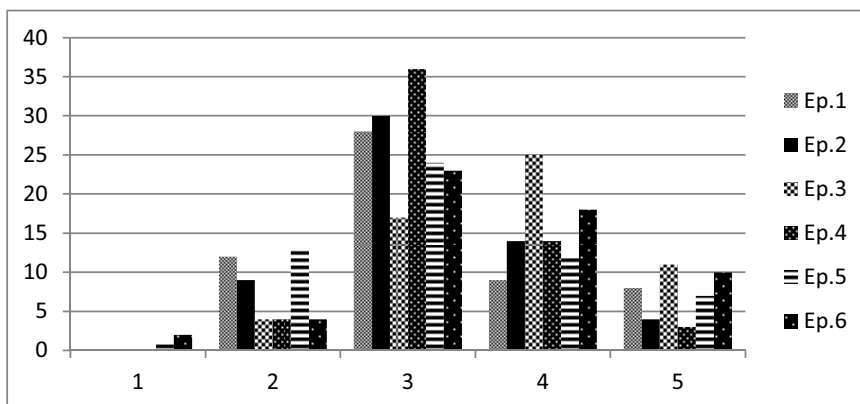


図5 エピソード別難易度 (n=57)

4.3 KED システムの学習履歴

次に、KED システムの学習履歴から、エピソードごとのディクテーション正解率の分布を図6に示す。

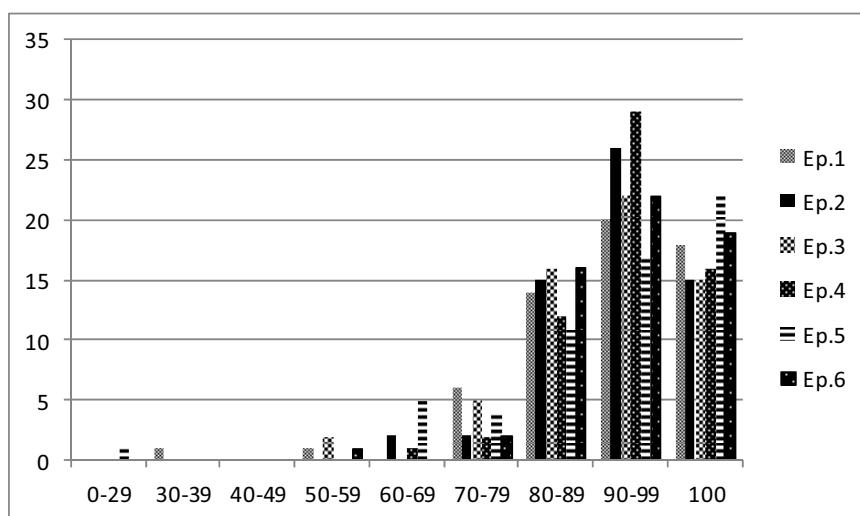


図6 エピソード別ディクテーション正解率の分布 (n=60)

反復ディクテーションの結果、どのエピソードも多くの学生が満点に近いスコアで提出している。先述の通り学生にとって難易度の高いEp.3については、90点以上取得者の数がやや減少している。

4.4 アンケート調査の結果（5段階評価）

ここでは、本実践の終了後に実施したアンケート調査を見る。回答者数は75名である。アンケートは以下の表2に挙げた13項目から成り、それぞれ5段階評価でマークカードに回答した後、

カード裏面に、今回の実践の良かった点および改善すべき点を記述するよう求めた。

表2 アンケート項目

1. ポッドキャストを利用した学習にまじめに取り組んだ。
2. 会話の題材は親しみやすいものだった。
3. 文字や画像による動画は、会話の理解に役立った。
4. 2種類のスピード（ナチュラル・スロー）は、会話の理解に役立った。
5. 画面上に表示された「聞き取りのポイント」は、会話の理解に役立った。
6. パソコンを使ったディクテーションの宿題は、会話の理解に役立った。
7. 英語での要約練習は、会話の理解に役立った。
8. 試訳は、会話の理解に役立った。
9. 動画を使った英語学習は楽しかった。
10. パソコンを使ったディクテーションの宿題は楽しかった。
11. ポッドキャストを使った学習は英語力の向上に役立った。
12. ポッドキャストで楽しく英語を学習できた。
13. 今後、ポッドキャストを英語学習に活用してみたい。

以下、学生の取り組みの真剣度（1）、教材および授業活動への評価（2～8）、動画やディクテーションの楽しさ（9～10）、ポッドキャストへの総合評価（11～13）、および自由記述に分けて、結果を記す。

まず、学生の取り組みの真剣度（1）を図7に示す。

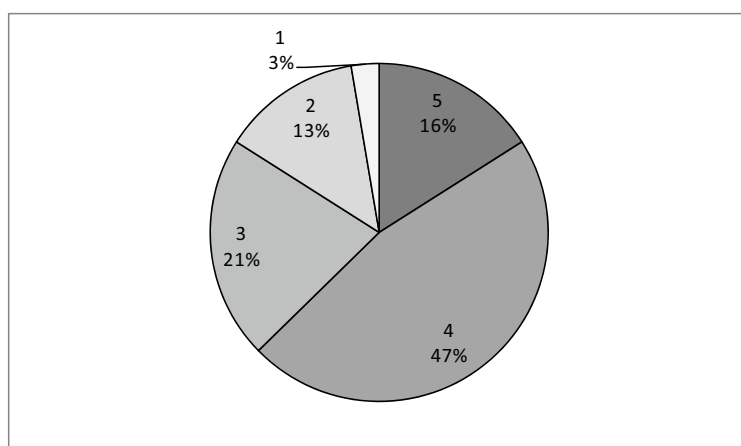


図7 取り組みの真剣度

4以上の回答が63%であることから、大多数の学生がまじめに取り組んだことがわかる。一方でどちらともいえない学生、あまり真剣に取り組んでいない学生がそれぞれ2割近い結果となった。

次に教材および授業活動への評価（2～8）を図8に記す。以下グラフ中の数字は回答数である。

4以上の評価の割合を見ると、2種類のスピードの77%を筆頭に、題材の親しみやすさ（56%）、聞き取りのポイント（53%）、ディクテーション（51%）、動画の利用（48%）についても、5割

前後の回答を得た。一方、授業中の英語での要約練習（20％）と、試訳の提示（33％）については、評価の低い結果となった。要約練習に関しては後述するが、会話のリスニングにおいて日本語訳を求める学生がきわめて少ないことがわかる。

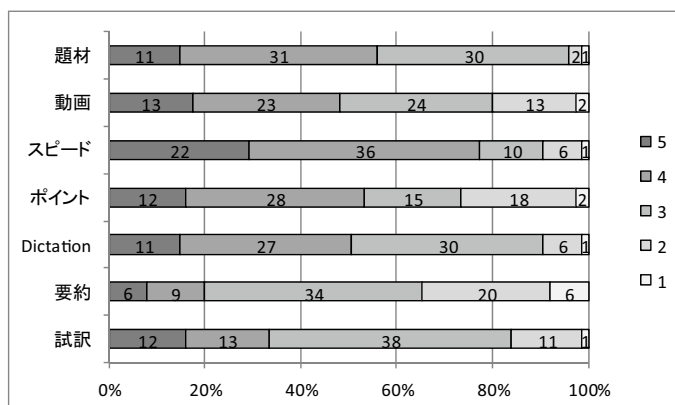


図8 教材および授業活動への評価

次に動画やディクテーションの楽しさ（9～10）の回答結果を図9、ポッドキャストへの総合評価（11～13）を図10に、それぞれ示す。

4以上の評価の割合では、動画を使った学習の楽しさ（56％）、ディクテーションの宿題の楽しさ（47％）、ポッドキャストを使った英語学習による英語力の向上（47％）、ポッドキャストを使った学習の楽しさ（49％）、ポッドキャストの今後の活用（53％）について、いずれも半数近い学生が肯定的にとらえている。

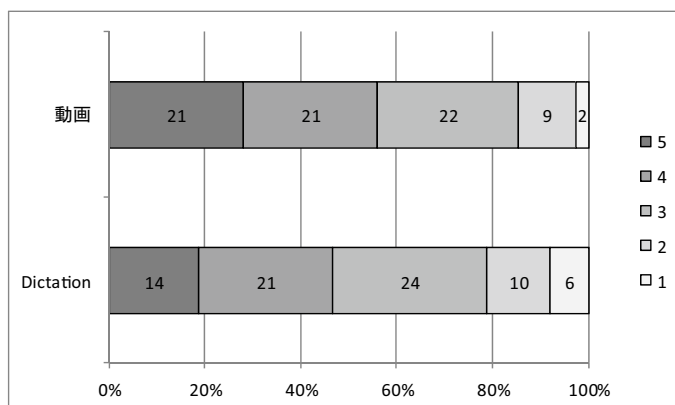


図9 教材の楽しさ

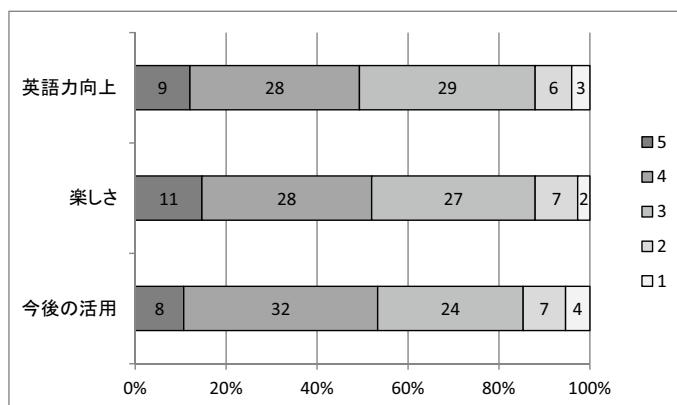


図10 ポッドキャストへの総合評価

4.5 アンケート調査の結果（自由記述）

次に、自由記述の意見から主なものを、「動画」「WBT」「授業活動」「ポッドキャストの有用性」の4つに分類し、表3に示す。

表3 自由記述による意見

	肯定的意見	否定的意見
動画	<ul style="list-style-type: none"> ● 動画付きの学習ゆえに進んで自分から行うことができた 	<ul style="list-style-type: none"> ● 声だけなので動画という感じがなく面白くない ● 会話に合ったアニメーションのようになるともっと学習が楽しくなると思う ● 途中で背景画像が切り替わったりするとよりわかりやすいかも
WBT	<ul style="list-style-type: none"> ● ネットに繋がる環境であればいつでもどこでも学習できた ● 聞くだけでなく打ち込むことでスベルの理解につながった ● 以前よりも細かいところを集中して英語を聞くようになった ● 何度も聞き取り練習ができたので、自分が納得するまで挑戦できる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 難しい問題はヒントが欲しい（訳や先頭の文字） ● 宿題の存在を忘れやすい
授業活動	<ul style="list-style-type: none"> ● ポイントを押さえながら聞いていくのはよいと思う（問いに答えるためにポイントを掴もうとする） 	<ul style="list-style-type: none"> ● 宿題の時点で選択問題が入っていた方がよかった ● 英語での要約練習はいいと思うがハードルが高く感じた（解答例を示してほしい） ● テスト後に少し内容の説明をしてほしい ● ディクテーション以外の問題も入れてほしい

ポッドキャストの有用性	<ul style="list-style-type: none"> ● スロースピードで会話を多少理解した上で普通のスピードを聞いたので、聞き取りやすくなっていた ● リスニングする機会が増え、リスニング力の向上に役立ったと思う ● 話が面白くてよかった。やりたい！という気分になった ● 自宅学習のリズムを作るのに役立った 	<ul style="list-style-type: none"> ● ストーリーが完結せずに終わるスキットがあった
-------------	---	--

WBTとポッドキャストの有用性については肯定的意見が目立ち、動画と授業活動については否定的意見の方が目立った。ポッドキャストを利用した教材については学習の動機づけに及ぼす多くのメリットを指摘し、リスニング力の向上を実感している一方で、音声テキストや画像と組み合わせたムービーについては物足りなさを感じ、授業活動におけるフィードバックの不足を改善点として挙げる意見が多かった。

5 まとめと課題

本実践の結果は以下の4点にまとめられる。

- (1) ポッドキャストを利用したBLを通じ、学生はHUEPの題材、内容、形式が学習の動機づけに効果的であると感じている。これは、これまでHUEPを利用した過去の実践結果をさらに裏付けるものである。
- (2) WBTを利用した自学自習についても、多くの学生が肯定的な評価をしている。
- (3) 今回の学習が、英語リスニング力の向上に効果的であると指摘する声も見られた。
- (4) 教室内での活動およびフィードバックについては、多くの改善点が指摘された。

一方、本実践の主な限界としては、(1) 素材はすべてHUEPであり、日常的なダイアログに限定されている、(2) BLが部分的な導入にとどまり、時間、活動、フィードバックが不十分であった、(3) ほとんどの学習活動の焦点が受容技能の養成に置かれている、(4) 英語リスニング力の変化についての測定が行われていない、以上の点が挙げられる。

最後に、今後の課題を以下に示す。

- (1) アンケート調査の自由記述において、ポッドキャストを利用したBLを通じた英語リスニング力の向上が指摘されているが、実際にリスニング力は向上しているのか。そうである場合、向上したのは具体的にどのような能力で、その向上はどのように測定が可能か。
- (2) ポッドキャストを利用したBLを、受容技能だけではなく発表技能の養成に発展させるためには、どのような活動が効果的か。

付記 本稿は、科学研究費補助金 基盤研究（B）23320115による研究成果の一部である。

注

- 1) Hiroshima University's English PodcastのURLは<<http://pod.flare.hiroshima-u.ac.jp/cms/>>。iTunesやTwitter、Facebookでも更新情報を配信している。
- 2) English News WeeklyのURLは<<http://pod.flare.hiroshima-u.ac.jp/cms/enw.php>>。音声

- ポッドキャストと自習用のPDFファイルを配信している。HUEPと同様に、iTunesやTwitter、Facebookでもアクセス可能である。
- 3) Graham (2005) はBLの定義について、先行研究を以上の3点にまとめている。(1) Combining instructional modalities (or delivery media). (2) Combining instructional methods. (3) Combining online and face-to-face instruction. 小論では、BLの定義として3番目のものを用いることとする。
 - 4) RSS フィードはウェブ上にある最新情報の見出しや要約を配信するためのメタデータを指す。ポッドキャストで用いられるのはRSS 2.0形式。
 - 5) VodcastとはVideo On Demandの頭文字を取った“VOD”と“broadcast”を組み合わせた造語である。一般的なファイル形式としてはMPEG-4が使われる。
 - 6) 吉田 (2010) はPaivioの二重符号化説を援用し、ことばで聞いた情報をイメージ化したり、ことばの情報と同時に、絵や写真などのイメージ情報が提示されたりすると、よりよく理解され、より印象深く記憶に残る点を指摘している。
 - 7) Windows LiveムービーメーカーはWindowsパソコンに標準でプレインストールされているので、本実践のような教材作成だけでなく、CALL教室におけるアウトプット活動にも利用できる。学習者が吹き込んだ音声に文字と映像を組み合わせるといわば「電子紙芝居」のムービーを作成する、デジタル・ストーリーテリング (Digital Storytelling) がその代表例である。
 - 8) ムービーに付加する画像は、オリジナルの素材のほかに、“Open ClipArt Library” <<http://openclipart.org/>> や「写真素材足成」 <<http://www.ashinari.com/>> を利用した。

参考文献

- Graham, C. R. (2005). Blended Learning Systems: Definition, Current Trends, and Future Directions. In Bonk, C. J. & Graham, C. R. (Eds.). (2005). *Handbook of Blended Learning: Global Perspectives, Local Designs*. San Francisco, CA: Pfeiffer Publishing.
- Lauer, J. (2008). High-quality Podcasts for Learning English. 『広島外国語教育研究』 11, 95-106.
- Lauer, J. (2009). Podcast Power: Hiroshima University's New English Listening Materials. 『広島外国語教育研究』 12, 85-94.
- Lauer, J., Enokida, K. (2010). A Longitudinal Study: The Effectiveness of Podcasts for Learning English. 『広島外国語教育研究』 13, 75-92.
- 池田真生子 (2008). 「Podcastingの利用法」竹内理 (編著), 『CALL授業の展開—その可能性を拡げるために』 (163). 松柏社.
- 榎田一路 (2008). 「ポッドキャストを英語学習に利用する上での予備調査とその考察—購読型教材配信によるモバイル英語学習システムの構築に向けて—」 『広島外国語教育研究』 11, 69-81.
- 榎田一路 (2009). 「英語学習用ポッドキャスト “Hiroshima University's English Podcast” —オリジナル番組の制作と配信システムの構築—」 『広島外国語教育研究』 12, 71-81.
- 榎田一路 (2010). 「オリジナル英語学習用ポッドキャストの授業での活用」 『広島外国語教育研究』 13, 65-74.
- 榎田一路 (2011). 「オリジナル英語学習用ポッドキャストの授業での継続的活用」 『広島外国語教育研究』 14, 71-82.

- 榎田一路 (2012). 「オリジナル英語学習用ポッドキャストの携帯電話への配信」『広島外国語教育研究』15, 75-87.
- 吉田晴世 (2010). 「ポッドキャストと語学教育」『大阪教育大学英文学会誌』第55号, 51-66.
- 本多薫, 森田光宏, Mark IRWIN, 富田かおる, Todd ENSLEN, Jerry MILLER (2009). 「インターネットを利用した英語学習支援システムの構築—動画配信による Podcasting の試み—」『山形大学人文学部研究年報』第6号, 51-70.

ABSTRACT

Blended Learning Using Visually-Enhanced Original English Learning Podcasts

Kazumichi ENOKIDA

The Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

Podcasts are beneficial to language education in supplementing limited class hours and providing students with enjoyable opportunities to immerse themselves in the target language. This is especially true of the tertiary level EFL/ESL education in Japan, where students are not given enough learning hours to improve their communicative skills in English. The Institute for Foreign Language Research and Education has developed and delivered original audio EFL/ESL podcasting programs called “Hiroshima University’s English Podcast” on the web and iTunes since 2008.

In this paper, a classroom practice is reported in which “Hiroshima University’s English Podcast” was used for blended learning, combining in-class activities with self-study outside the class utilizing WBT. This practice was conducted for six weeks in two classes. Outside the class, students were requested to listen to the podcast episodes and work on the dictation on a “KED System” and WebCT. Video clips made from the audio episodes were put onto the KED System via YouTube. These clips provide visual information, like image and text, that facilitates listening comprehension. With the KED System, students can improve their listening skills through repeated dictation practice, after which they receive prompt feedback that allows the students to check their answers as often as they want. Part of the class hours were given to listening comprehension and summary activities based on the episodes they listened to on WBT. To assess the effectiveness of this practice, the results are analyzed and discussed based on students’ questionnaire feedback on this learning experience.